災害リスクコミュニケーション

常態化した大雨被害

7月14日からの大雨は、県内の多くの地域に甚大な被害をもたらしました。にかほ市内は一部道路の法面がくずれるなどしましたが、大きな被害にみまわれることはありませんでした。

国内では、毎年のように大規模な水災害が発生しています。これまで比較的大雨被害の少ないとされていた東北地方も他人事ではなくなっています。そして、7月の大雨は、梅雨前線が活発化したためとはいわれていますが、もはや想定外はなくなったという現実を私たちにつきつけるものでした。

これから秋雨前線、台風の季節です。みなさんにはいざというときにすぐに対応できるよう、日頃から十分な備えをお願いします。

治水砂防

7月11日、盛岡市で全国治水砂防協会東北支部総会が開催されました。

治水砂防ということばとその内容、どのようなもので、どのような働きをしているのかなどを知っている人は少ないと思います。ですが、治水砂防の果たしている役割はとても大きく、なかでも砂防ダムは毎年多くの人命と財産をまもってくれています。

現在、全国各地に9万個以上が整備されている砂防ダムは、山奥にあったりするためにふだん人の目にとまることはありません。しかしながら、この砂防ダムは見えないところで多くの土石流による被害を防いでくれています。ですので、災害リスクを減らすという観点からも、私は砂防ダムの大切さをぜひ多くの人に知ってもらいたいと思っています。

災害リスクコミュニケーション

前述の砂防ダムのように、防災あるいは災害に対する大切な情報がありながら、その情報を伝えたい行政とそれを受けとる住民の間にギャップがあり、なかなか伝わらないというジレンマを感じることがたくさんあります。このときに災害リスクを住民に適切に伝えていくうえで役立つであろうと思うのが災害リスクコミュニケーションという考え方です。

先の総会で、国交省の草野愼一砂防部長が災害リスクコミュニケーションについて話されていました。今回のコラムでは、草野部長が話された釜石市の例を紹介しながら、災害リスクコミュニケーションについて考えてみたいと思います。

釜石市のはなし

「釜石の奇跡」ということばは多くの人々に知られています。東日本大震災のときに釜石市鵜住居地区の小中学生全員が津波におそわれることなく高台に逃げたというものです。

徹底した防災教育、とくに「つなみてんでんこ」を子どもたちに教えこんだことが奇跡を生んだ大きな理由だと言われています。実は、この「つなみてんでんこ」を子どもたちに浸透させるために、もう一つふだんの教育のなかで子どもたちに津波の怖さを刷り込むための仕掛けがありました。それは算数の授業です。

たとえば、センチメートルをメートルに換算する問題です。「350㎝は何mでしょうか」という問題があったとします。釜石市の小学校では、この問題は次のようになります。

「釜石市に高さ350㎝の津波が来ました。津波の高さをmであらわしなさい」

日頃から子どもたちに津波を無意識のうちに、意識させる仕掛けが巧みに用意されていたのです。

あきらめずに工夫をする

伝えたい側と受け取る側のギャップをうめるには、立ち止まって悩んでいるだけでなく、枠をこえたところでアイデアを出して試してみることが大切なのだと思います。「発想の転換」です。釜石市の例は、「防災教育」という言い方ではなかなか多くの人たちに関心をもってもらえないことに対する答えの一つなのかもしれません。

災害に対する取組みなど、行政には決してあきらめてはならない分野があります。その意味からも、日常の中で災害リスクコミュニケーションを図るという工夫は大切な視点だと思います。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。